

### 3 関東と東北を結ぶ道～街道と鉄道～

栃木県北部地区は、古来より関東と奥州を結ぶ重要な交通の拠点でした。

古代には那珂川沿いに白河の関を越えて多賀城(宮城)に向かう東山道、中世には鎌倉と平泉を結ぶ奥大道(秀衡街道)、そして、近世には、江戸時代の五街道の一つである奥州街道(奥州道中)が鍋掛・越堀を通り、宿場として発展していきました。

正保2～3年(1645～46)にかけて、会津藩等が廻米や物資輸送のために原街道を整備し、その路線は白河から黒磯・西那須野を経て氏家の阿久津河岸に至りました。

また、元禄8年(1695)には、会津藩の主要な道として大峠を越えて三斗小屋・板室本村・百村本田・高林・下横林を通り氏家に至る会津中街道が開削されました。また、尾頭峠を越え塩原から阿久津河岸に至る会津西街道の脇道である塩原道の街道筋にあたる関谷は宿場を形成しました。

明治に入ると三島通庸により陸羽街道のルートが変更され、道路は開拓地の中央を縦断します。また、三島村を基点として塩原を抜け山形に抜ける塩原新道が開削されると、開拓地は一気に交通の要衝として変貌を遂げます。

明治19年(1886)には日本鉄道那須駅(現西那須野駅)・黒磯駅が開業。後に、西那須野駅を基点として塩原方面に塩原軌道、大田原方面に東野鉄道が開業し、駅を中心として急速に市街化が進んでいきました。

これら交通の発達は、那須塩原市の経済的発展に寄与し、歴史文化に深く関わるのです。

#### ●奥州街道と鍋掛・越堀

江戸時代の初期に、徳川幕府によって江戸と奥州を結ぶ奥州街道が開かれました。この街道は、東海道・中山道・甲州街道・日光街道とともに幕府五街道のひとつとして数えられていました。街道の呼称については、地域により様々で、『享保通鑑』によれば、享保元年(1716)4月の記録に「日光道中、甲斐道中」とはあるものの、民間では海道や街道と混同されるケースが多かったようです。宝暦8年(1758)には、五街道の名称と区間について議論がされ、区間が明確化されるとともに名称も「道中」とされましたが、現在では奥州街道と呼ばれるのが一般的です。

奥州道中は、江戸の千住から陸奥の白河まで27宿(宇都宮までの17宿は日光街道と重複)を数え、鍋掛宿・越堀宿は23・24宿目となります。鍋掛から大田原宿まで2里30丁、越堀から芦野は3里、荷物の継立(輸送)は片継で、鍋掛は芦野までの下りのみ、越堀は大田原までの上りのみでした。江戸時代の参勤交代では、東北方面の30を超える大名家がここを通過しました。現在は県道72号大田原芦野線となっています。

#### 鍋掛宿

鍋掛宿は、宇都宮から6番目の奥州街道の宿場です。北は那珂川を隔て越堀宿になります。開宿は奥州街道が整備された慶長9年(1604)頃かと考えられています。慶長5年(1600)徳川家康の上杉攻めの際、下館城主の水谷勝俊が鍋掛に陣し、翌6年(1601)の「前田慶次道中日記」に「大たはら米はあれとも其ままに煮てやかまましなへかけのまち」とうたわれており、すでに奥州へ通じる道に町場を

形成していたことがうかがえます。参勤交代によって当宿を通る大名の多くは昼食か小休憩に利用しました。

### 越堀宿

越堀宿は、慶安4年(1651)の「下野一国」に「越堀新田村」とみえ、宇都宮宿から7番目の奥州街道宿場として発展してきました。近世は黒羽藩領に属し、寛永年間(1624~43)から宿場が整い始め、正保3年(1646)正式に宿場として認められています。明治17年(1884)、陸羽街道(旧奥州街道)が路線変更により黒磯村方面に移り、同20年日本鉄道(現東北本線)が福島県郡山まで開通すると、旧奥州街道を通る旅客や物資は激減し、宿の機能は次第に薄れてきて現在に至っています。

分野	名称
指定文化財	鍋掛の一里塚・芭蕉の句碑・黒羽領境界石・寺子地藏尊 正観寺のシダレザクラ・鍋掛のイトヨ・寺子のエドヒガン・越堀の大杉
未指定文化財	正観寺・浄泉寺・会三寺・樋沢不動尊・温泉神社・八坂神社・加茂神社・ 鍋掛神社・竈神・六十六部供養塔・馬頭観世音(多数)・鍋掛もちつき唄



鍋掛宿跡付近一里塚



鍋掛宿跡に残る奥州街道の旧道



那珂川(越堀の昭明橋より上流側)



黒羽領境界石

### ■ 鍋掛宿・越堀宿の位置関係図



## 高久靄厓

南画家の高久靄厓は、江戸時代の画家です。那須塩原市越堀字杉渡土の高久家出身で、幼少のころから絵を好み、黒羽の画家小泉斐あやるに絵の手ほどきを受けました。その後、大田原・鹿沼・仙台等を遊歴して絵を学び、文政6年(1823)の時江戸にのぼり、谷文晁ぶんちようの門人となりました。たちまち頭角を現し、渡辺崋山・椿椿山・立原杏所らと並ぶ画家として名声を博しました。代表作に《歳寒三友図》等があります。

天保14年(1843)4月8日、病のため江戸の画室で48歳で急逝しました。墓碑は、杉渡土西方の高久家の墓地にあります。靄厓の妻が江戸を引き上げて故郷の仙台に帰る途中、高久家に滞在し靄厓の遺髪を埋め、位牌をかたどって墓石を建てたと伝えられています。

分野	名称
指定文化財	紙本墨画山水図・絹本淡彩夏暁山水図・絹本墨画松溪曳杖図・西園雅集図屏風・高久靄厓の墓



西園雅集図屏風



松溪曳杖図



山水図



高久靄厓の墓

## ●物資の輸送に利用された原街道（原方道）

原街道は、正保2～3年(1645～46)にかけて会津藩等によって整備された、現在の福島県白河より氏家町の阿久津河岸に至る街道です。概して現在の国道4号と一致、あるいは、平行して通っています。当時は黒磯で奥州道中練貫に向かう道が分岐し、蛇尾川付近で槻沢を通過するルートと石林を通過するルートの2つに分かれていました。槻沢を通るルートは薄葉で日光北街道に合流し、石林を通るルートは箒川手前の平沢を通り、阿久津河岸へ向かいました。別称・異称には、原方街道・原方道・米積街道などがあります。当初から、会津藩の廻米など物資の輸送路として利用されました。残念ながら、往時の状況をとどめている箇所は少ないのが現状です。



原街道絵図



石林の道標

分野	名称
指定文化財	石林の道標(市・有形民俗)・原街道絵図・本郷町の馬頭観世音
未指定文化財	槻沢の問屋跡

### ●会津中街道～険しい山越えの道～

天和3年(1683)の日光地震により男鹿川が堰き止められ、湖が出現したことにより、男鹿川沿いを通る会津西街道が通行不能になりました。その代替え道として整備され、元禄8年(1695)に開通したのが会津中街道です。会津若松城下を起点とし奥州道中氏家宿に至る31里10町52間のルートで、会津若松城下より白河に至る会津東街道、同じく今市に至る会津西街道に対して中街道と呼ばれています。

会津下郷町の旧弥五島村・塩生から東に折れ、松川・野際新田を経て那須連山の大峠を越え、三斗小屋・板室・百村・高林・横林を通り、大田原市域に入り矢板・氏家の阿久津河岸へ至ります。享保8年(1723)には会津西街道が復旧し機能しますが、西街道より20kmほど短いルートでもあるため、その後も継続して使用されました。また、慶応4年(1868)の戊辰戦争時には、会津藩などの旧幕府軍と新政府軍との激戦地ともなったことで知られています。

〈会津中街道のルート〉

会津若松⇒面川⇒番塩⇒小塩⇒桑原⇒小出⇒弥五島⇒松川⇒野際⇒大峠(県境)⇒三斗小屋⇒板室⇒百村⇒高林⇒横林⇒石上⇒山田⇒矢板(日光北街道と合流)⇒川崎⇒乙畑⇒氏家(31里10町52間≒128km)⇒阿久津(鬼怒川舟運)



笹野曾里西の一里塚



横林の一里塚



下大貫の一里塚

分野	名称
指定文化財	湯本道標・一里塚(板室本村東西一対、横林東西一対、下大貫一対、笹野曾里東西一対) 板室本村の銅造大日如来坐像・板室古戦場・三斗小屋宿跡
未指定文化財	高林の一里塚・早坂の一里塚

### ●塩原道と関谷宿

塩原道(尾頭道)は、会津西街道の脇道で、尾頭峠を越え塩原に至る最短の街道です。天和3年(1683)の日光地震によって五十里湖ができた時、一時的に塩原経由氏家阿久津河岸に至る会津藩の廻米道として利用されました。その街道筋に宿場として形成されたのが関谷宿です。

関谷の集落は、もともとは現在の場所より西方の「古屋敷」にありましたが、交通が盛んになったことを契機として現在地に移りました。享保8年(1723)には会津西街道が復旧しますが、会津西街道

並びに会津中街道経由の物資輸送路として利用され続けました。関谷宿は、将軍の代替わりごとに派遣される幕府巡見使の通路になっており、少なくとも3回は宿場に泊った記録が残ります。

慶応4年(1868)8月23日の戊辰戦役時には、宿内の21戸が焼き払われました。

### ●新陸羽街道と塩原新道～道路網の整備～

明治になり、栃木県令三島通庸はこの塩原道の開削整備に乗り出しました。これは、三島通庸が福島県令時代の明治15年(1882)に、会津若松を中心にして山形県(米沢)、新潟県(新潟)、栃木県(大田原)の三方を結ぶいわゆる「会津三方道路」の計画の一環として計画されたものです。

塩原新道(現国道400号)と呼ばれたこの街道は、大田原を起点に関谷、塩原温泉、善知鳥沢<sup>うとうざわ</sup>を経て山王峠に達する計画で、後に起点を三島に変更して整備されました。塩原新道は明治17年(1884)10月に完成し、これにより温泉地としての塩原の名が広く知られる契機となりました。

新陸羽街道(現国道4号)は、塩原新道の開削と合わせて県令三島通庸が整備した国道です。名目上は陸羽街道(旧奥州街道)の改修となっていたようですが、宇都宮から白河に至る区間はほぼ路線が変更されました。中でも、下石上(大田原市)～黒磯間は新道の開削を行っており、新道が三島農場を通過していることが当時の県議会で物議をかもしました。

この新陸羽街道の開通は、塩原新道と同じ明治17年(1884)10月で、二つの街道の開通式典は同日に、三島地内で挙行されました。新陸羽街道が開拓地を縦断したことで、那須野が原の開拓に拍車がかかったといえます。

道路網の整備は以降も続き、東日本の大動脈の一つである東北自動車道が、昭和49年(1974)12月に矢板-白河間が開通し、国道400号と接続する西那須野塩原インターチェンジが開通。平成21年(2009)には黒磯板室インターチェンジが開通し、市内に二つのインターチェンジを擁することになりました。

### 高橋由一

高橋由一は「日本近代洋画の父」と言われる画家です。明治14年(1881)より三島通庸の要請により、三島が行った数々の土木工事の記録画を描いており、塩原新道を含む「会津三方道路」の記録も依頼されています。由一は、明治17年(1884)8月から11月まで108日にわたって栃木・福島・山形県を写生旅行し、そのスケッチをもとに石版画『三県道路完成記念帳』を作成しました。その中から7枚を油絵に仕立て、これに三島農場を描いた1枚を加えて《鑿道八景》としました。

分野	名称
指定文化財	関谷常夜灯・関谷の駐蹕碑・鑿道八景
未指定文化財	三島通庸紀恩碑・御公儀様御巡見日記帳

## ●近代那須地区の歴史を大きく変えた東北本線

明治 19 年(1886)に宇都宮－黒磯間が竣工し、明治 24 年(1891)に上野駅から青森駅まで全線開通した東北本線は、関東と東北を結ぶ一大動脈として東北新幹線と共に機能し続けています。当初、宇都宮－白河間は旧奥州街道に沿って計画され、測量まで終えていましたが、宇都宮以北は、矢板、西那須野、黒磯、黒田原を通る路線に変更され、その結果新陸羽街道同様に鉄道も那須野が原の開拓地を通ることとなり、開拓地への人口流入と駅前の都市化が進みました。また、鉄道の開通は、旧道に面した宿場町の衰退を招くこととなります。

路線の変更の理由は定かではありませんが、那須野が原に開拓農場を構えていた元勲大山巖、西郷従道をはじめとする政府高官たちの存在が大きかったことが指摘されています。

## ■宇都宮～白河間の鉄道路線



### 市内の3つの鉄道駅

西那須野駅は、当初那須駅として明治 19 年(1886)に開設され明治 24 年(1891)現駅名となりました。明治 25 年(1892)の栃木県の統計では、大田原や塩原を背後に抱えたことにより、上下車とも 30,000 人を超え宇都宮・小山に次ぐ乗降客で賑わいました。

黒磯駅は路線変更と地区の活動により誘致され、東京－仙台の中間の位置であり、機関庫を有する 2 等駅としての規模を持っていました。駅前には、鉄道関係者の役員住宅をはじめ、商人の進出、鍋掛宿からの旅館の移転などにより市街化が進みました。乗降客も明治 25 年(1892)には 20,000 人を越え、貨物出荷取扱量も宇都宮に匹敵する勢いで伸び、明治 25 年(1892)には 15,000 トンを越えるものでした。さらに、大正年間の黒磯駅からの貨物発送では、木炭が大正 6・7 年(1917・1918)にピークを迎え 16,000 トンに達しています。また、木材も伸び続け大正 3 年(1914)に 4,000 トン前半から 5 年後には 13,000 トンを超え 3 倍強にもなりました。その他、硫黄や葉タバコ、穀類が輸送されました。

新幹線開業と鉄道輸送交通体系の変化により、黒磯駅前はかつての賑わいは減りましたが、現在は新たな駅前を模索する再開発が行われています。

東那須野駅は、明治 31 年(1898)に開業しました。昭和 57 年(1982)に東北新幹線の停車駅となり現在の「那須塩原駅」になりました。新幹線開通以降は、皇族が那須御用邸に向かう際の乗降駅として、それまでの黒磯駅に代わり利用されており、那須地域の観光の玄関口となっています。

## ●那須人車軌道と塩原軌道（塩原電車）

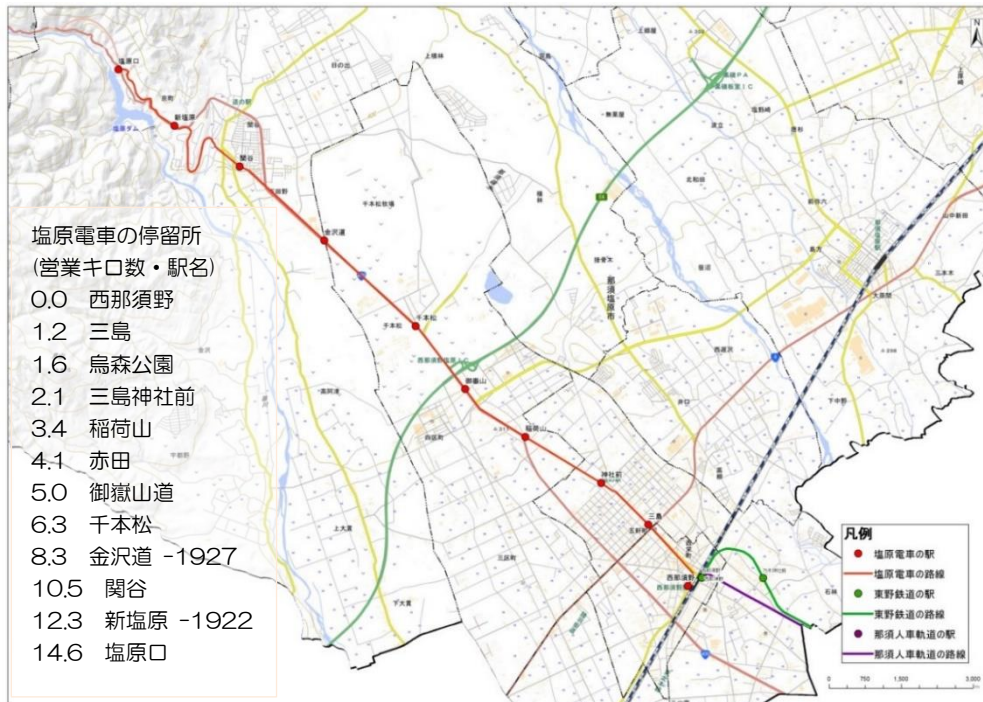
明治19年(1886)の東北本線開業で、西那須野駅(明治24年(1891)那須駅から改名)が新たな交通の拠点となったことで、周辺にも地域の流通や経済の活性化を試みる私鉄が生まれました。

那須人車軌道の開業は、明治41年(1908)のことです。文字通り人力で客車や貨車を輸送する鉄道で、大田原街道の路面を利用し、西那須野～大田原間約5キロメートルを繋ぎました。

開業当初は盛況でしたが、大正7年(1918)に開業した東野鉄道や、乗合自動車の開業で業績が悪化し、昭和5年(1930)営業休止、同9年に廃止となりました。

塩原軌道(後の塩原電車)は、西那須野駅～塩原口駅間14.6kmを結んだ軽便鉄道の鉄道会社です。明治45年に西那須野駅～関谷間が開通し、大正4年(1915)には約2.5キロメートル延長されました。大正10年(1921)に電化され、翌年には塩原口までの約1.7キロメートルが延長されましたが、創業以来赤字が続き、併せて、乗合自動車の普及や金融恐慌等により利用者が減少し、昭和8年(1933)に休止の後、昭和10年(1935)に廃止されました。

### ■塩原電車の路線



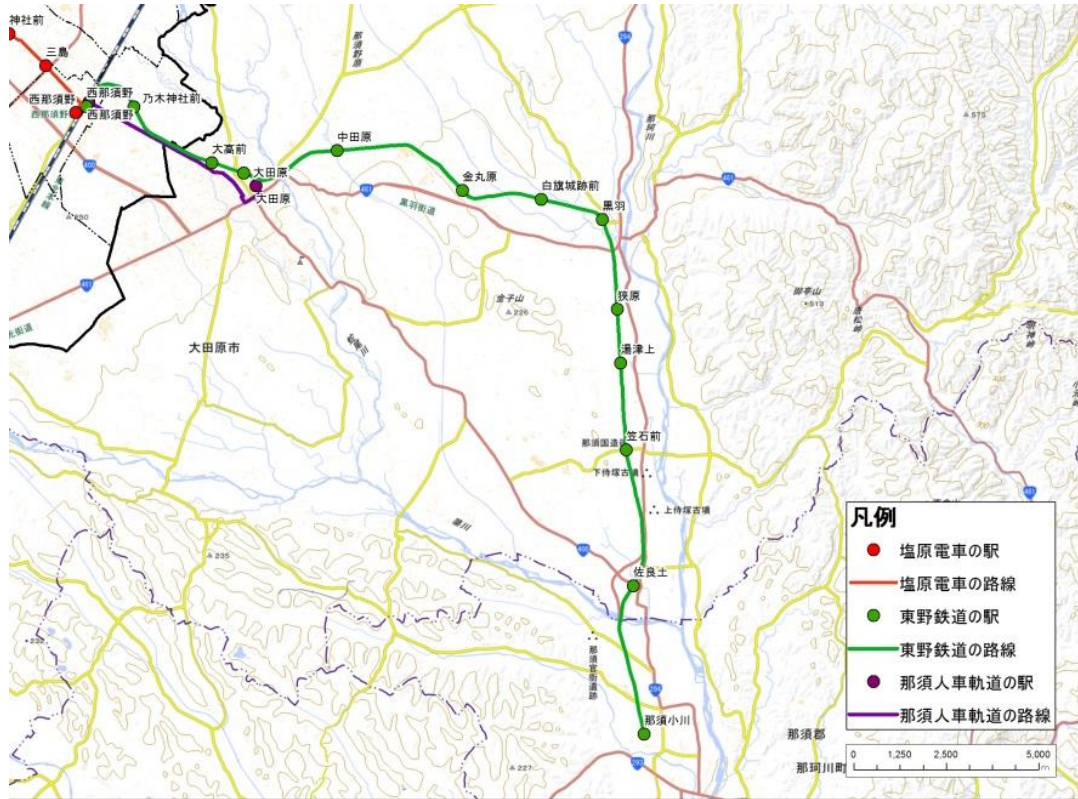
※国土地理院地図を利用し作成

## ●西那須野と大田原・八溝山地をつないだ東野鉄道

東野鉄道は、西那須野から黒羽を経て、小川町(現・那珂川町)の那須小川までを結んでいた鉄道で、大正7年(1918)に西那須野～黒羽間が開通し、大正13年(1924)に黒羽～小川間が開通しました。当初から総延長を茨城県の大子までとする計画でしたが、実現には至りませんでした。乗客数は昭和22年(1947)をピークに激減し、昭和43年(1968)に全線が廃止されました。営業距離は24.4kmあり、駅数は13駅ありました。廃線跡のうち西那須野駅から4.2kmの区間が自転車・歩行者専用道路となり、現在は「ぼっぼ通り」の名で親しまれています。

分野	名称
指定文化財	塩原軌道「塩原口」駅舎跡
その他文化資源	ぼっぼ通り

■ 那須人車軌道と東野鉄道の路線



※国土地理院地図を利用し作成



## 4 水の恵みを求めて～疏水と大農場～

那須塩原市の歴史は、開拓の歴史と言っても過言ではありません。

北西部の山地を除いた大部分は那須扇状地の扇頂部と扇中部に位置し、水利の乏しい痩せた土地で、江戸時代には用水の開削と新田開発が行われましたが、11,000ヘクタールにも及ぶ茫漠たる原野が明治初頭まで取り残されていました。

明治政府による財政改革の一環で、那須野が原が官有原野となり、国からその土地を借受けた大規模農場が次々と生まれました。これらの大農場は、はじめは結社農場として開設されたものが大半を占めましたが、明治20年代にかけてほとんどが解散し、有力な個人の手に移りました。その中で特に目を引くのが華族による経営で、いわゆる華族農場と呼ばれるものが最大時には11を数えました。これら華族農場の存在は国道や鉄道、そして、那須疏水の開削というインフラ整備にも多大な影響を及ぼしました。

那須疏水は、はじめ運河計画として構想されたものでした。印南丈作・矢板武の度重なる陳情により、やがて灌漑用の大水路の開削が認められ、明治18年(1885)9月に本幹水路16.3キロメートルが竣工、続いて4本の分水路が開削され、開拓地を潤しました。これらの費用は国費で賄われました。

戦後になり、電動ポンプにより地下水の利用が広まり、畑の水田化が進み、水田面積は飛躍的に増加しました。また、戦後の食糧増産を目的として国が進めた開拓団の那須野が原への入植が、現在の酪農産業の隆盛へとつながっていきました。

開拓地の水との闘いは、現在の田園風景や本州一の酪農地帯を生み出した、昭和40年代からの国営那須野原総合開発事業へと続いていきます。

### ●旧村をうるおす用水網と幕府の新田開発事業

江戸時代における那須野が原の水利開発には、次のようなものがあります。

#### ■ 臺沼用水

臺沼用水は、慶長年間(1596-1615)に臺沼・折戸・上横林・横林・接骨木の5か村の飲用水路として蛇尾川から水を引いた接骨木掘を起源とします。のちに石林村まで延長され、さらに、安永2年(1773)には大田原城下に延長されました。この用水は、大田原藩の管理のもとに明治まで維持され、現在も灌漑用に利用されています。

#### ■ 巻川用水

巻川用水は、唐杉・東沓掛・西沓掛・北弥六・前弥六・上厚崎・下厚崎の7か村の飲用水路として請願され、正保4年(1647)に開削されました。取水地は熊川上流の大巻川で、総延長は約18キロメートルに及びました。

#### ■ 長島堀

長島堀は、万治元年(1658)に新田開発を目的として開かれた大規模な用水路で、取水地は那珂川上流の岩崎村でした。しかし、その後取入口が崩落、改修工事が行われたものの、延宝4年(1676)の幕府巡見使により工事の中止が命じられ廃堀となってしまいました。なぜ工事が禁止されたのか多くの疑問が残りますが、堀の規模は大きく、現在もところどころその堀跡を見ることができます。

## 穴沢用水

穴沢用水は、宝暦 13 年(1763)もしくは明和 2 年(1765)に、百村の枝村であった穴沢村民が、飲用水を確保する目的で那珂川の支流木ノ俣川から約 5 キロメートルを自普請により開削したものです。その後、下流の村々の要望により延長し、安永堀・細竹用水・木綿畑用水が、明治に入り厚崎堀が開かれました。その総延長は 25 キロメートルに及び、それらを総称して現在は旧木ノ俣用水と呼ばれています。

## 山口堀

山口堀は、寛政 5 年(1793)幕府代官として赴任した山口鉄五郎によって、新田開発を目的として、穴沢用水を拡張して開かれた用水路です。文化 7 年(1810)に完成した水路は、穴沢からほぼ直線的に東小屋村に進み、東小屋で吉際村方面と練貫村方面に分岐しており、また、唐杉村でも分岐して下大塚新田に延びていました。総延長は約 30 キロメートルに及び、この水路によって約 210 町歩の水田が計画され、当時としては画期的なことでした。しかし、幕末になると管理が行き届かなくなり、文政末期(1829 頃)には開田した水田の大半が畑に戻ってしまいました。明治 18 年(1885)に復活され、現在は路線変更を行って東小屋下流方面で使用されています。

分野	名称
指定文化財	穴沢用水水神祭絵図・穴沢用水普請供養塔・曇沼用水旧取水口・東小屋村全図
未指定文化財	巻川用水・長島堀跡・長島堀取水口・穴沢用水・山口堀・小巻川用水・護安沢堀・曇沼用水 百村『光徳寺文書』・『大野家文書』
その他文化資源	百村新田・木綿畑新田・長嶋新田・上大塚新田・下大塚新田・山中新田

## ●日本三大疏水の一つ～大農場を潤す那須疏水～

那須疏水は、内務省直轄の国営事業によって開かれたもので、安積<sup>あさか</sup>疏水(福島県)・琵琶湖疏水(滋賀県・京都府)と並び、日本三大疏水の一つに数えられます。平成 18 年(2006)に建造物として国指定有形文化財に指定、平成 29 年(2017)に追加指定を受け、今日に至っています。

最初の取入口は、明治 18 年(1885)に那珂川の絶壁にトンネルを掘って造られましたが(第一次取入口)、この取入口には水量の調節や土砂の流入を防ぐための開閉施設がなく、大水等によって取入口がたびたび使用できなくなったため、明治 38 年(1905)に約 200m 上流に取入口を変更し(第二次取入口)、使用されなくなった第一次取入口は予備の水門として石積みが行なわれました。その後、川の流れが変わり、取入口は大正 4 年(1915)に再び元の位置に戻されました(第三次取入口)。昭和 3 年(1928)には水量調節施設の設置や上部へのアーチ型の石積み等の増設が行われ、現在見られる石組みの水門となりました。

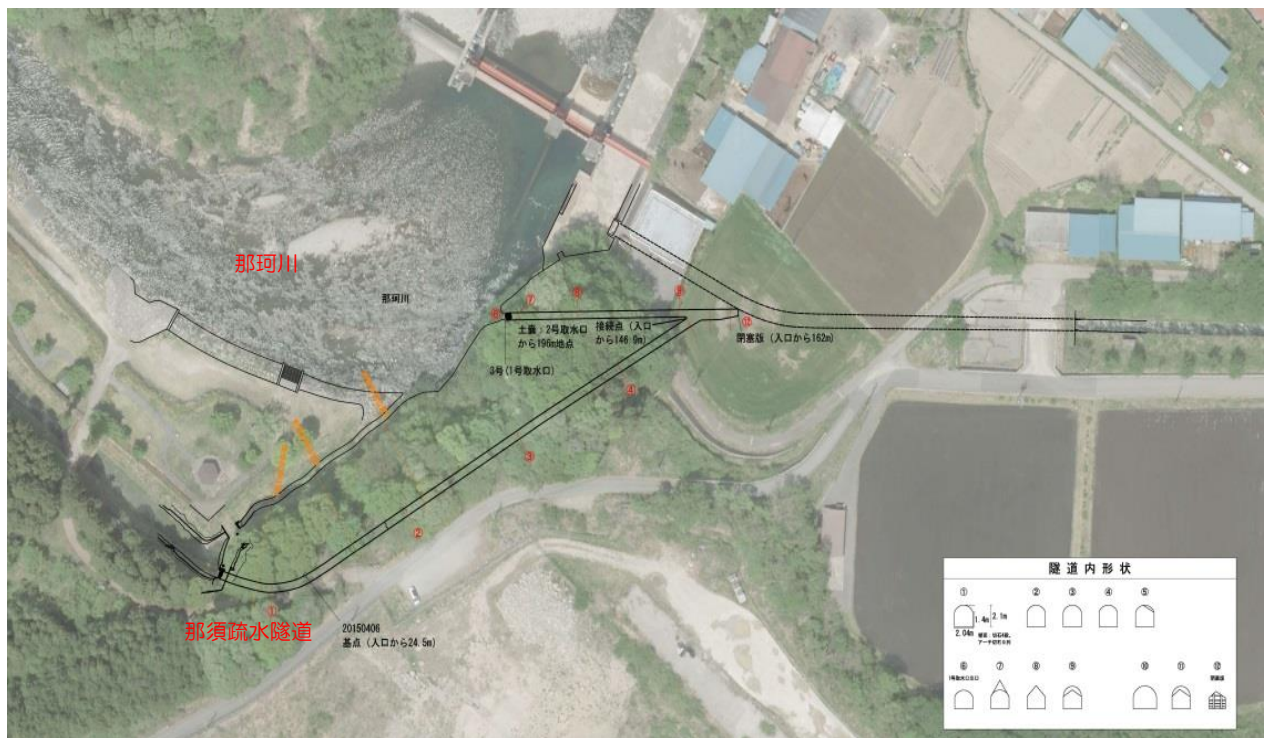
昭和 51 年(1976)の那須野原総合開発事業により西岩崎頭首工(第四次取入口)が建設されたことにより、これまでの取水施設は使用されなくなりましたが、当時の状態を良好に残しており、近代における大規模水利施設の取水システムの構造を知る上で大変貴重であることから、平成 18 年度(2006)に国の重要文化財に指定されました。

平成 26 年度(2014)に東・西水門から延びる隧道(東・西隧道)の調査が行われ、調査の結果、両隧道はどちらもほぼ完全な姿で残されていることが判明し、当時の土木技術の高さを示す貴重な証拠で

あるとともに、既に指定されている旧取水施設と一連の施設として価値が高く、保存の必要があることから、平成 29 年(2017)に追加指定となりました。

那須疏水は、水路の延伸や断面積の拡大などの改修工事を経て、当初わずかだった灌漑面積は、現在 2,600ha へと拡大しており、農家主体の組織が、水の有効利用や合理的水配分や施設の保全などを主目的として適切な維持管理を行っています。これは、水はけの良い土地条件を活かした畑作振興に大きな影響を与えており、水稻以外にも梨、苺などを特産品とする多角的農業を可能にする大規模農業生産地として、人口約 171,000 人を有する地域の食料生産・農業農村などの地域経済発展に大きく貢献しています。こうしたことから、平成 29 年(2017)10 月 10 日国際かんがい排水委員会メキシコ会議において、「那須疏水(堰及び水路)」は世界かんがい施設遺産として認定・登録されました。

### ■ 那須疏水取入口と隧道



※那須疏水調査図

### 大運河構想

那須疏水の開削は、明治 9 年(1876)に栃木県令鍋島幹が提唱した大運河構想にまで遡ります。これは、鍋島県令が当時進行中の地租改正の推進を図る説明会を行うため大田原に出張し、地主総代会を開催したときに打ち出したもので、那珂川から取水し那須野が原を経て鬼怒川に至る遠大な計画でした。

この構想に強く共感したのが、当時佐久山宿名主であった印南丈作と栃木県第三大区三小区戸長であった矢板武でした。翌年 1 月には、二人が中心となり 5 日間をかけて運河予定路線の实地踏査が行われ、この結果は県に報告され、これを受け県令自身ものちに現地の見分に訪れました。

これにより固まった水路開削計画は、総延長約 45 キロメートル、高低差約 319 メートル、総工費 156,774 円にも及ぶもので、明治 12 年(1879)6 月に請願書として提出されましたが、政府の取り上げるところとはなりませんでした。

## 那須原飲用水路

運河開削運動が進展を見ない中、那須野が原には大規模な開拓農場が次々開設され、水の確保が重大な問題となっていました。明治13年(1880)9月、肇耕社と那須開墾社の関係者より「那須原水路開鑿之儀ニ付願」が栃木県に提出され、これを受けた県は「那須野原飲用水路開鑿之儀伺」を内務卿松方正義に提出し許可されました。この飲用水路の工賃は22,707円の見積でしたが、工事の遅れ等もあり、最終的には分水路の開削費用を含めると57,508円にも上りました。

完成した飲用水路は、細竹から取水した千本松まで約15.2キロメートルの本幹水路と3本の分水路からなり開拓地を潤すこととなりましたが、洪水や崖崩れが頻発し明治17年(1884)には機能しない状態となっしまい、翌年開通した那須疏水にその役割を譲ることとなりました。

## 那須疏水開削まで

飲用水路が完成間近の明治15年(1882)10月、印南丈作と矢板武は政府に対し運河建設のための測量の願を出しています。翌16年(1883)にも運河開削に関する請願書を提出し、運河建設に対する並々ならぬ熱意を見せます。

印南・矢板の二人は、明治16年6月から18年(1885)4月にかけて、計6回、総日数237日、上京して政府の有力者に水路開削の請願を行っています。請願の内容は、水路開削だけではなく、私費による隧道の試削、開削費用10万円の国費下付も含まれました。また、請願の内容は、途中から運河から灌漑用大規模用水開削へと変化していきました。

熱心な運動の結果、103人の賛成を取り付け、明治18年4月には国費10万円の国費下付が認可されました。これにより那須疏水開削は国の直営工事となりました。

工事は明治18年4月15日、烏ヶ森の丘上において起工式が行われ、内務省土木局疏水課長南一郎平の総監督のもと5か月という短期間のうちに完成し、9月15日肇耕社事務所において通水式が挙行されました。

那須疏水は、西岩崎から千本松までの本幹水路と4本の分水路からなり、当時の水路延長は62.5キロメートル、その後分水から多くの支線水路が開かれ、開拓地を潤しました。本幹水路の水量は250個(1個の水量は1立方尺=毎秒0.278t)で、漏水分50個を除いた200個(毎秒5.56t)を農場面積に応じ配分することとし、分水路の水量が決められました。

## 水車

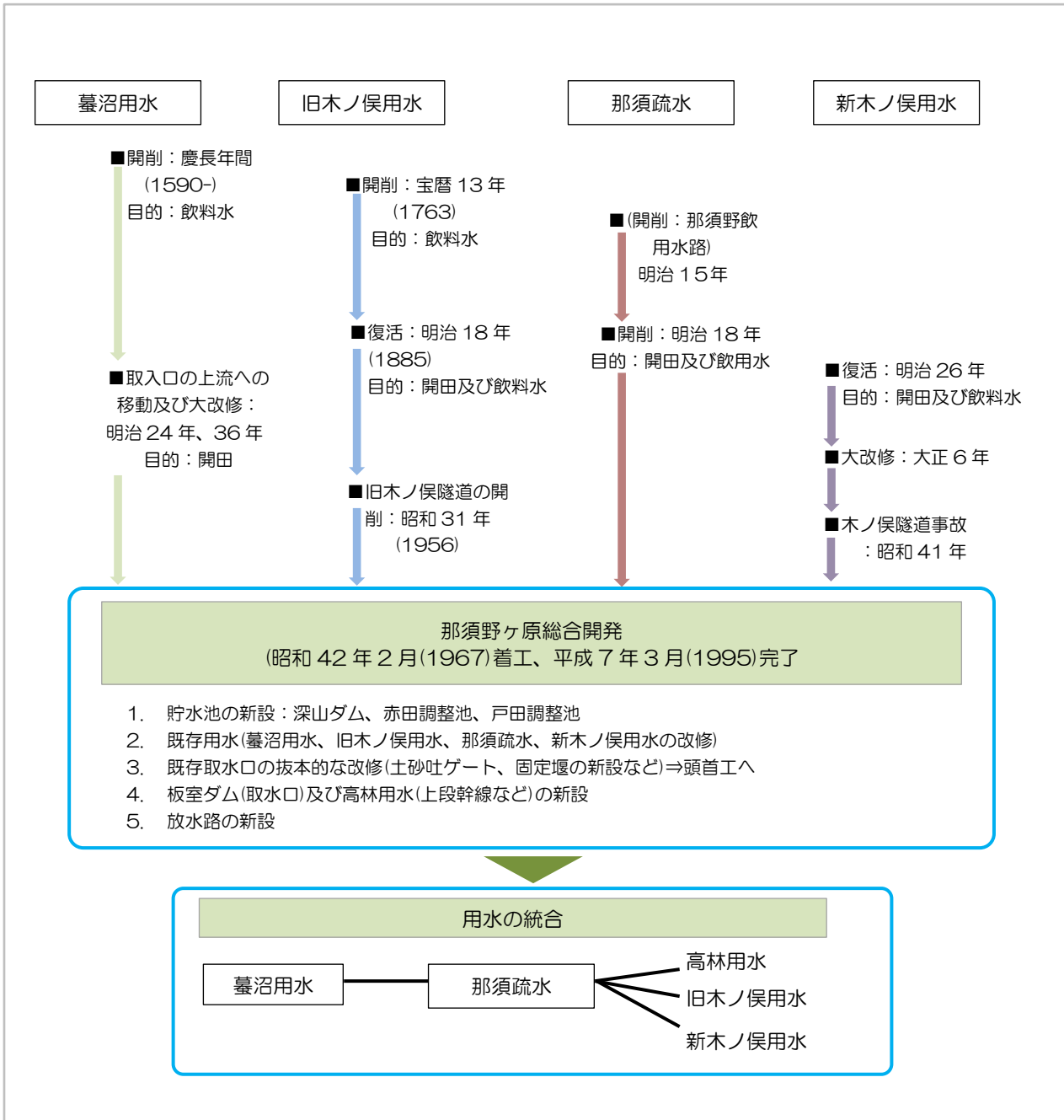
那須野が原においては、那須開墾社により明治17年(1884)に水路を利用した水車が使われたのが始まりのようです。那須疏水を利用した水車の設置は、明治中ごろから認められ地区全体では168基が数えられます。那須疏水を利用した水車は、大正の初期から昭和にかけて増えていき100基を超える数となっていました。いずれも精米・脱穀などの農業利用のほか製材や発電目的もありました。実際に稼働した水車は昭和50年頃消えていきました。



那須疏水にかかる復元水車

また、地域を特徴づけるものに、らせん水車があります。この水車は主に北陸地方に発達するもので、鉄芯型と木胴型とがあり、昭和初期に導入され昭和20年代まで脱穀などの目的で使われていましたが、発動機などの普及により次第に使われなくなりました。

## ■ 那須野ヶ原総合開発成立まで



※那須野ヶ原土地改良区連合

### 旧青木発電所

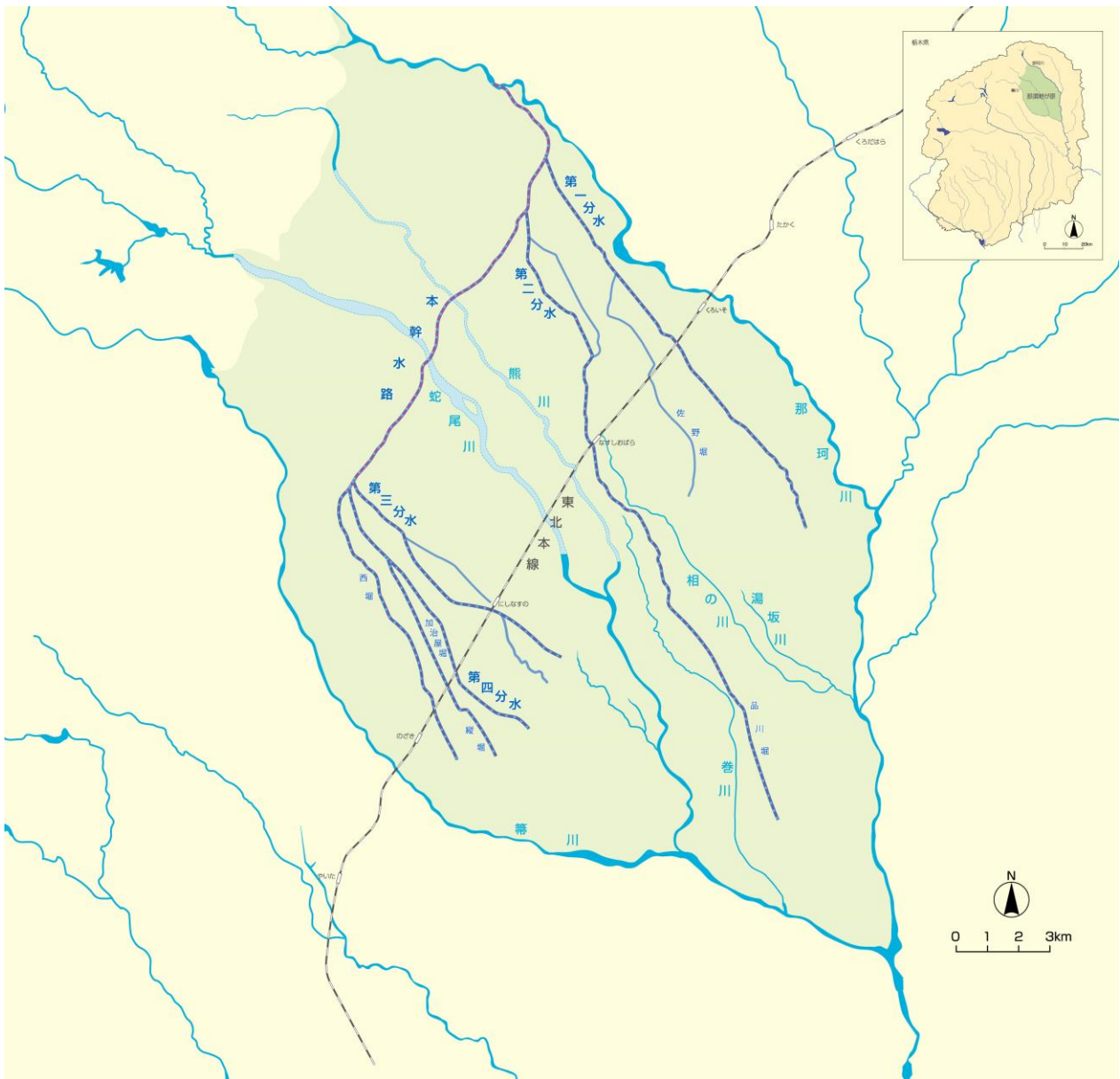
本幹と第2分水の分岐点の上流に設置された2.5mという低落差による小水力発電で、昭和27年(1952)に送電を開始し、約10年間操業を続けました。当時は全国的にも珍しく、東南アジアからも視察が来るほどでした。

こうした取組が、現在にも受け継がれています。



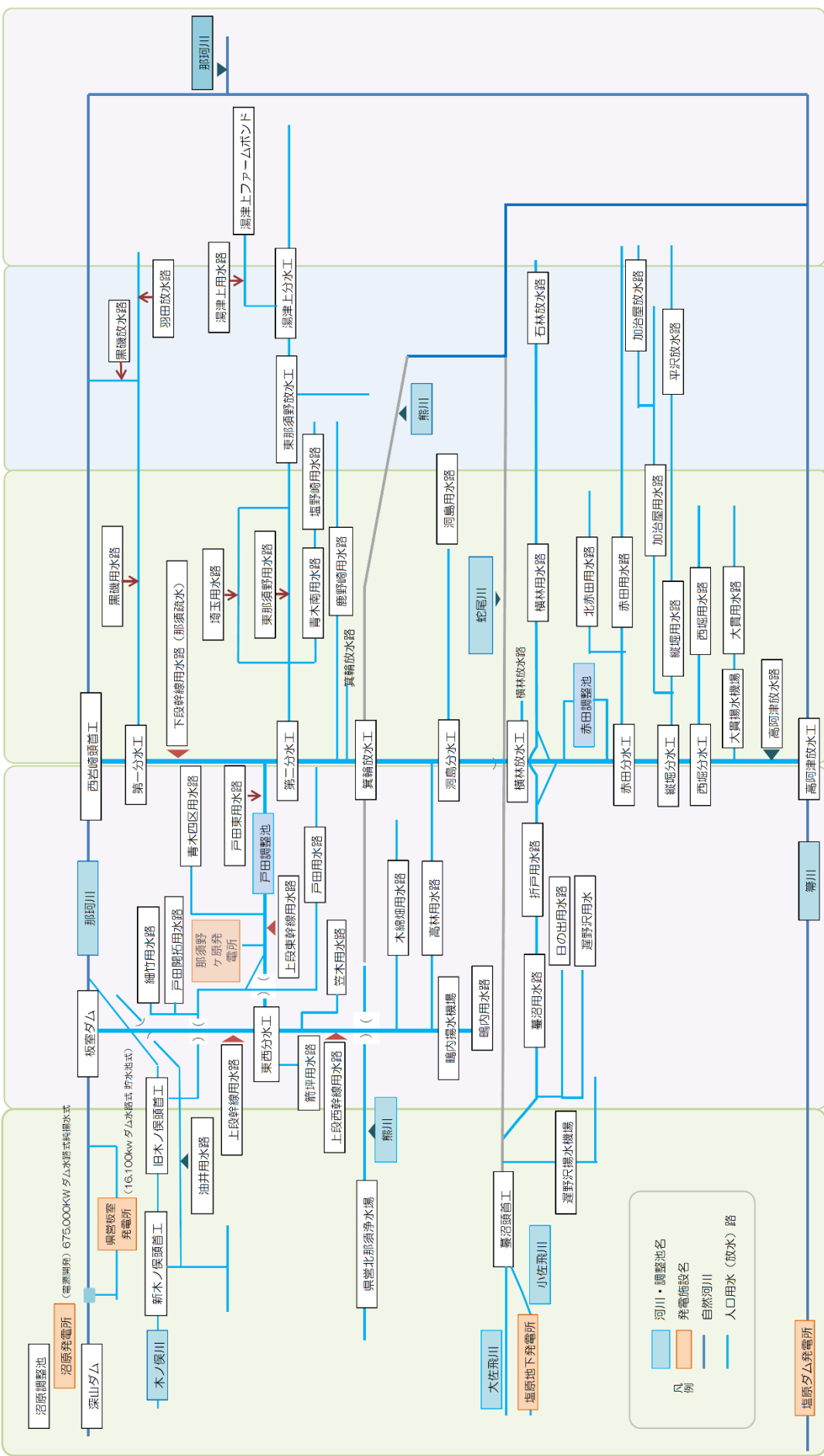
旧青木発電所（小水力発電）

## ■ 那須疏水地図



※那須野が原博物館

■ 那須野ヶ原表層水の体系



※那須野ヶ原土地改良区連合

分野	名称
指定文化財	那須疏水旧取水施設(東水門、西水門、導水路及び余水路、東隧道、西隧道) 附指定(疏水橋、1号護岸、2号護岸、東3号護岸、西3号護岸、那須原疏水線實測全圖、那須原疏水線建築圖綴、那須原疏水工事竣工説明 那須疏水旧蛇尾川伏越出口・那須疏水関係文書 印南丈作翁屋敷跡・烏ヶ森の丘・常盤ヶ丘・親王台・赤田山・印南丈作の頌徳碑
未指定文化財	那須疏水本幹水路・那須疏水分水路

## ●大農場による開拓

明治初期の税制改革の一環で実施された官民有区分事業によって、明治11年(1878)に那須野が原11,298町歩が官有地に編入されました。この広大な官有原野は、首都からわずか150キロメートルに位置し、しかも、極めて平坦な土地であったことから、開拓地として注目を浴びることとなり、明治13年から20年を中心に、那須野が原官有原野の貸下げを受けた開拓農場が続々と開設されました。

那須野が原の開拓農場の特徴は、数百町歩に及ぶ大規模なものが多く、中には3,000町歩を超えるものもありました。那須野が原に展開した大規模農場のうち、主なものは以下のとおりです。

### 肇耕社

肇耕社は、明治13年(1880)最初に那須西原の貸下げを受け開設された開拓結社で、農場面積は約1,000町歩ありました。代表は、時の山形県令三島通庸の長男彌太郎でしたが、実質的な代表者は通庸本人だったようです。通庸はこの一帯を見渡せる赤田山に上り、開拓の構想を練ったといわれています。また、赤田山のふもとの北西側にあった赤田沼は、移住人の水くみ場所となっていました。

事業の主な内容は、開墾・植林・牧畜であり、牧畜では農場の北部500町歩を牧場に充て明治14年(1881)で170頭の牛を飼育しました。肇耕社は明治19年(1886)に解散し、農地の大部分を取得した通庸が個人農場である三島農場を設立しました。

### 那須開墾社

那須開墾社は、印南丈作・矢板武を中心に明治13年(1880)年に那須西原で発足した結社農場です。当初の面積は3,000町歩、明治14年(1881)には3,419町余歩となり、那須野が原最大の規模を誇りました。

直営による開墾事業は、西洋式大農具の導入により進められましたが、移住人は入植条件として付与された土地を自力で田畑に替える必要がありました。また、牧畜と植林も行なわれました。明治21年(1888)には移住人分与地・植林地・寺社・公共用地を除いた約1,300町歩が株主に分配され、同26年(1893)結社は解散しました。

### 加治屋開墾

加治屋開墾は、元勲であった大山巖と西郷従道の共同経営により明治14年(1881)に那須西原に開設されました。面積は500町歩でした。主な事業は直営による開墾・牧畜・植林のほか、農場地内に敷設された東北本線の那須駅(現西那須野駅)の開業による住宅地の貸付けや、搾乳による牛乳の販売も行われました。

農場は明治34年(1901)分割され、それぞれ大山農場、西郷農場として経営されました。

### 千本松農場

千本松農場は明治26年(1893)に解散した那須開墾社から1,141町歩を譲り受けた元勲松方正義が経営した個人農場です。農場面積はその後拡大し最大時1,635町歩に及びました。



主に、山林事業と大農法による開墾、牧畜が行われました。農場内には、野火の延焼を防ぐための防火線が五町(約 545m)間隔で縦横に設けられていました。山林事業は黒字でしたが、開拓による畑作と牧畜は赤字で、損失の補填は松方家本邸からの借入で賄われていました。

昭和 2 年(1927)の金融恐慌により 2 代目農場主の松方巖が頭取を務める第十五銀行が経営不振となったため、個人資産を提供することとなり経営が松方家から離れました。

#### 青木農場

青木農場は、明治 14 年(1881)にドイツ公使青木周蔵が那須東原の官有原野に設立した個人農場です。当初の面積は 582 町歩でしたが、拡大を続け最大時 1,586 町歩にまでなりました。

青木周蔵はドイツ貴族の経営する林間農業を実践し、森林の育成に力を入れました。森林は赤松と雑木の混合林で、赤松は材木として、雑木は薪や木炭として販売され収益をあげました。

#### 佐野農場

佐野農場は、明治 14 年(1881)に旧佐賀藩士の佐野常民により那須東原に開かれた農場です。大正 14 年(1925)時の面積は 257 町歩であったと記録されます。大正 10 年(1921)の調査では、農場面積の約 30 パーセントが、水田及び畑として開墾されており、残りは山林として木材や木炭の製造販売に充てられました。

#### 毛利農場(豊浦農場)

毛利農場は、明治 17 年(1884)に元長府藩主毛利元敏が栃木県から那須東原及び那須高原の県営那須牧場の貸下げを受け開設した農場です。面積は、那須東原 906 町歩、那須高原 1,000 町歩でした。

事業内容は開墾と牧畜で、大正 14 年(1925)時の記録では、水田 8 町歩、畑 255 町歩、牧場 779 町歩、山林 233 町歩、原野 141 町歩で宅地を含めた総面積は 1436 町歩となっています。

#### 戸田農場

戸田農場は、元大垣藩主戸田氏共が明治 20 年(1887)に那須東原の最北端部の官有原野 931 町歩の貸下げを受け開設した農場です。当初は欧米式大農法を導入した開墾を目指しましたがうまくいかず、明治 30 年(1897)頃からは入植者を募り、林業中心の経営に転換しました。

#### 東肇耕社

東肇耕社は、明治 14 年(1881)に那須東原の官有原野 800 町歩の貸下げを受けて開設された結社農場です。東肇耕社と那須西原の肇耕社の株主の多くは重複しており、両社は密接な関係にあったと思われま。東肇耕社の貸下げ地は、明治 19 年(1886)に青木農場に譲渡されています。

#### 共墾社

共墾社は、士族授産を目的として明治 16 年(1883)に発足した結社農場で、貸下げを受けた面積は当初 580 町歩ありましたが、入植した士族が当初の計画に満たなかったため 108 町歩を残し後は返還されました。

分野	名称
指定文化財	印南文作翁屋敷跡・常盤ヶ丘・親王台・赤田山・那須開墾社烏ヶ森農場跡 那須開墾社関係文書・印南文作の頌徳碑・三島農場事務所跡
未指定文化財	三島開墾紀恩碑・熾仁親王植樹記念碑

## ●開拓の労苦を語る「石塚」

蛇尾川の沿川や箒川左岸の台地である三島農場区域や那須開墾社区域の表層土を除く那須扇状地では、礫が混在する層が帯状に分布しており、そのような土地では開墾の際に多量の礫を取り除かなければなりません。こうして取り除いた石・礫は畑の隅に積み上げられ「石塚」・「石ぐら」などと呼ばれました。現在では、石塚・石ぐらの石が再利用されたり、埋められたりしてあまり見られなくなりましたが、広大な那須扇状地を開拓してきた誇りと苦労を雄弁に物語っています。

## ●目をみはる大農場区域

肇耕社の中央には、面積約 150 町歩の碁盤の目状の区割りが形成され今もその姿をとどめています。一区画は 50 間×60 間の 1 町歩で 144 区画設けられていました。三島通庸は、そこに駅、郡役所、小・中学校、病院、銀行、警察署、郵便局などの配置を計画しており、都市化を前提としていたことがうかがえます。同じく、那須開墾社においても、明治 8 年(1875)に始まった関八州大三角測量の時に設定した那須基線をもとに整備された約 10 キロメートルの直線道路が農場内を貫き、西側に 100 間(約 182 メートル)隔てって並行した直線道路が整備されています。これに交わる横道はおおむね 150 間(約 273 メートル)の間隔で規則正しく並んでおり、開拓地において計画的な区画整理が進められたことがうかがわれます。こういった人工的な区割りは、千本松農場や青木農場等の開拓地にも共通してみることができます。

## ●華族農場の果たした役割

近代の那須野が原開拓における農場数は、本州最多を誇ります。さらに、華族に列せられ人たちの農場は 19 農場に上り、那須野が原は本州最大の華族農場群があった場所といえます。

海外留学体験により、欧州貴族を模範とし、貴族の領主的な性格を意識していた華族は、天皇の藩屏としての役割を担いました。「土地を持つ」「領主になる」という意識を持つ彼らにとって、東京から近距離にある那須野が原はまさにうってつけの場所だったと考えられます。

華族が那須野が原にこぞって農場を開墾したことにより、この地の地勢は一変しました。茫漠たる原野に国道や鉄道と呼び込み、国営事業として灌漑用大水路を実現させたのは彼らの影響力であったといえます。

## ■華族開設者と開拓農場

No.	農場名	開設年	開設者・経営者	爵位	肩書き	面積 (町歩)	位置	備考
1	肇耕社	明治 13 年(1880)	三島通庸 他			1,037	西原	明治 19 年解散
2	那須開墾社	明治 13 年(1880)	印南文作・矢板武 他			3,419	西原	明治 21 年分割
3	郡司開墾	明治 14 年(1881)	郡司忠平・磯金平 他			50	西原	地元結社農場
4	加治屋開墾場	明治 14 年(1881)	大山巖・西郷従道			500	西原	明治 34 年分割
5	漸進社	明治 14 年(1881)	西山真太郎		馬頭町長	373	東原	明治 27 年分割
6	那須東原開墾社	明治 14 年(1881)	吉田市十郎 他		大蔵小書記官	985	東原	通称[埼玉開墾]
7	東肇耕社	明治 14 年(1881)	深津無一 他		大蔵主税官	683	東原	明治 19 年拝借替

8	佐野農場	明治 14 年(1881)	佐野常民・常羽・常光	伯爵	博愛社社長・大蔵卿	257	東原	
9	青木農場	明治 14 年(1881)	青木周蔵・梅三郎	子爵	外務大臣・独逸公使	1,586	東原	
10	石丸農場	明治 15 年(1882)	石丸安世 他		大蔵大書記官	233	東原	
11	共墾社	明治 16 年(1883)	天野武三郎 他		宇都宮警察署長	108	東原	
12	毛利(豊浦)農場	明治 18 年(1885)	毛利元敏・元雄	子爵	旧長府藩主	1,436	東原	
13	長地農場	明治 19 年(1886)	渡辺国武	子爵	大蔵大臣・福岡県令	101	西原	
14	三島農場	明治 19 年(1886)	三島通庸・弥太郎・通陽	子爵	栃木県令・警視總監	673	西原	旧肇耕社
15	戸田農場	明治 20 年(1887)	戸田氏共	伯爵	旧大垣藩主	883	東原	
16	千本松農場	明治 21 年(1888)	松方正義・巖	公爵	大蔵大臣・総理大臣	1,650	西原	旧那須開墾社
17	矢板農場	明治 21 年(1888)	矢板武		下野銀行頭取	360	西原	旧那須開墾社
18	鳥山農場	明治 21 年(1888)	鳥山貞利		東京府会議員	152	西原	旧那須開墾社
19	大久保農場	明治 21 年(1888)	大久保利和	侯爵	大蔵省官吏	119	西原	旧那須開墾社
20	佐々木農場	明治 21 年(1888)	佐々木高行・高美	侯爵	参議兼工部卿	130	西原	旧那須開墾社
21	大島農場	明治 21 年(1888)	大島高任		日本鉱業会長	190	西原	旧那須開墾社
22	千坂農場	明治 21 年(1888)	千坂高雅・高節		岡山県令	72	西原	旧那須開墾社
23	田嶋農場	明治 23 年(1890)	田嶋弥三郎		養蚕家	65	西原	
24	鍋島農場	明治 26 年(1893)	鍋島直大	侯爵	旧佐賀藩主	383	東原・糠塚原	旧石丸・深川農場
25	伊東農場	明治 28 年(1895)	伊東弥太郎		日本銀行員	100	西原	
26	若林農場	明治 30 年(1897)	若林謙次郎		肥料商	140	西原	
27	藤田農場	明治 33 年(1900)	藤田和三郎		薪炭商・県議会議員	842	東原	旧東原開墾社・漸進社
28	高田農場	明治 33 年(1900)	高田慎蔵		高田商会	190	西原	
29	大山農場	明治 34 年(1901)	大山巖・柏	公爵	陸軍大臣・元帥	273	西原	旧加治屋開墾場
30	西郷農場	明治 34 年(1901)	西郷従道・従徳	侯爵	海軍大臣・元帥	246	西原	旧加治屋開墾場
31	細川農場	明治 36 年(1903)	細川潤次郎	男爵	枢密院顧問官	68	西原	
32	甲子農場	昭和 3 年(1928)	甲子不動産			190	西原	
33	栄農場	昭和 13 年(1938)	村尾敏一		村尾汽船社長	229	西原	

※『那須野が原に農場を』（那須野が原博物館）

## ●華族の別邸

市内には、華族農場の名残ともいえる洋風別邸がいくつか現存しています。時の政府高官として多忙な毎日を送っていた農場主たちは、公務の合間を縫って視察と休養を兼ねて、自身の農場を訪れたのでしょう。そのために建てられた別邸は、農場主の嗜好を反映し独特の存在感を放っています。

ドイツ翁と呼ばれた青木周蔵の別邸は、ドイツ様式の工法で建てられています。白い蔦型のスレートと度重なる増改築により形づくられた複雑な造形が見る者を圧倒します。

松方正義が建てた別邸は、南に全面ガラス窓のサンルームを配した総 2 階の建物で、1 階の壁は大谷石で飾り石造建築風の重厚さを漂わせています。

大山巖の別荘は、農場内で焼かれた煉瓦を使用し積み上げた堅牢なたたずまいの平屋で、その隣に「薩摩屋敷」と呼ばれる和館を配しています。

これらの建物は、この地が開拓の地であったと同時に、近代日本における避暑地の先駆けであったと考えられます。



旧青木家那須別邸



松方別邸



大山別邸洋館

分野	名称
指定文化財	旧青木家那須別邸・乃木希典那須野旧宅・大山記念館洋館・旧塩原御用邸新御座所 大山参道のみもじ並木・乃木神社の樹林
未指定文化財	旧松方別邸・大山別邸和館・開拓関連資料・華族邸宅関連調度品等資料一式・三島神社・毛利神社・乃木神社・佐野天満宮・母智丘神社・鍋島農場解放記念碑 下永田の「赤レンガ」建物
その他文化資源	東三島・西三島・三島・永田町・千本松・四区町・三区町・二区町・一区町・北二つ室・二つ室・下永田・埼玉・共墾社・豊浦・渡辺・佐野・青木一区など